



Title	松田道雄という人：解説に代えて
Author(s)	鷲田，清一
Citation	臨床哲学ニューズレター．1998，2，p. 120-122
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/81756
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

驚田清一

子どもが生まれ、はじめて育児というものを経験したとき、いのちをもったこの存在がすべて自分のこの手、この判断にかかっていると考えると、とても不安になる。身体のどんな小さな変化もつい深読みしてしまう。そんなとき、該当箇所を読むと、症例のわかりやすい説明のあとにたいいてい、「心配しなくていい」「心配せずに、ふつうに遊ばせておけばいい」といった記述が出てきて、心底ほっとする育児書があった。スポック博士のそれと読者を二分していた松田道雄の『育児の百科』（岩波書店）である。

「はじめて、五分か六分みる医者よりも、うまれて以来その顔を知っている母親のほうが、赤ちゃんの健康をよくみわけられるはずだ。そのためには、母親は赤ちゃんの顔をよくみていないといけない」。あるいは、「湿疹をかならず治す注射などというのではない。赤ちゃんをいじめないほうがいい」。あるいは、「母乳に不足している栄養は他のものでおぎなえるが、子どもの魂をなくさめる愛は母親の胸にしかない」。あるいは「育児で大切なのは、体重をふやすことではない。独立できる人間にしあげることである」……。対症療法だけでなく、そういう心がけもきちんと書いてあった。戦後、核家族という生活形式がしだいに浸透していくなかで、こんなときどうしたらいいの、と相談すべきひとが家内にいないヤング・ママとパパにとって、この分厚い事典は育児の大先輩というべき“おばあちゃん”の役をはたしたのであった。

松田道雄。アカデミズムと大学病院の外にあって、「人民を啓蒙する」という意識をもった医師の側からでなく、病人の側から治療を考えるという姿勢を貫いた医師であり、「子どもの立場から育児を批判」して、逆に世の母親たちにはいちばん信頼されていた小児科医である。松田がこの本のなかで訴えたもっとも重要な点は、もちろん日本の幼児教育批判もあるが、集団保育の必要性である。「集団保育が、そとではたらく母親たちだけに必要な時代は去った。幼児は、いままでも、集団のなかで成長したのだ。自動車の氾濫と住宅の密集とが、幼児からあそび場と仲間とをうばったので、幼児たちは家庭に軟禁されることになった。すべての幼児に集団保育の場をあたえて、軟禁の孤独から解放するのはすべての母親の願いである」

と強く主張した。この背景には、『育児の百科』のあとがきにみずから記しているように、レニングラードの小児研究所付属の保育園と第七回全ソ小児科学会（1957年）での経験があるようだ。そう、この小児科医は英独仏語の研究文献のみならず、ロシア語文献も戦前より精確にフォローしてきたわが国でも屈指の医学者なのである。

1908年に茨城県に生まれた松田道雄は、幼少のころ家族とともに京都市に引っ越す。勉強、診療、執筆……その活動のほとんどはその後、鮮烈なまでにアヴァンギャルドな気風が漂うこの古い都でいとなまれることになる。マルクス主義との出会いは、京都大学医学部の入学試験の帰り道であった。それまで気になっていた雑誌「マルクス主義」と無産者新聞を本屋で手に入れたときにはじまる。マルクス主義との煩悶にみちた関係は、昭和30年の六全協のあと、立命館大学で「戦争とインテリゲンチア」という題で講演し、自分と共産党との距離をはっきり述べたそのときまで続く。医学部を卒業して小児科の医局に入ったのち、自分の仕事は日本の「労働者農民」がいちばん困られている病気と取り組むことだと考え、そのためには子どもの死亡率のいちばん高い病気を治すこと以外にないと考えて、結核性髄膜炎の研究に打ち込んだ。が、小児結核について研究するといっても、小児科の医師は医局の制度上内科病棟には入れないし、また大学病院には重症患者しか入院してこなかったの、機会をみつけていさぎよく市内の療養所に転出する。そこは、市内でもとくに貧窮の人びとがやってくる無料の健康相談所であった。その極貧の生活条件を変えるまではできず、手をこまねいて死をみとるしかなかったその無力感をふり払うかのように、働きに働いた。「通勤の電車で「ロシア語単語五千語」をおぼえ、相談所で70人の患者をみ、小児科医局に寄って新入院のカルテに目を通し、図書室でフランスの病理学をよみ、家にかえって雑誌「結核」のためにソ連からくる「ペディアトリア」（小児科学）を抄訳し、眠るまえに「ボヴァリー夫人」を訳とくらべながらよめた日は使命をはたしたような気がした」と、自嘲げみに回想するような生活が続いた。

「ボヴァリー夫人」が出てくるところが、やわらか頭の松田らしい。その後、警察から危険思想家扱いされたり軍医として兵舎での生活を送りながらも、いつも文学書、思想書は手放さなかった。モーパッサン、ボードレール、ゴーゴリからデカルト、トロツキーまで、中島敦、斎藤茂吉から太宰治までむさぼり読んだ。これが戦後、松田がもったもう一つの顔につながっていく。久野収の勧めで、松田は昭和24年、末川博、恒藤恭、田中美知太郎、桑原武夫、田畑茂二郎、奈良本辰也らの学

者にまじって平和問題懇話会に参加する。そして「論争と自己主張のために主題が何だったか忘れられてしまう民科のサークル」とは違い、自由で穏やかで精緻な論争に魅かれる。そして昭和35年からは、メンバーのひとり桑原武夫の率いる京都大学人文科学研究所の「共同研究」に積極的に参加していく。比較革命や文学理論の研究を分担し、あの輝かしい「人文研」の唯一の在野の研究員になったのであった。その後、貝原益軒の『養生訓』『大和俗訓・和俗童子訓』やチェルヌィシェフスキーの『哲学の人間学的原理』、トロツキーの『レーニン』の翻訳もおこない、さらに昭和49年には、とうとうロシア革命の通史（河出書房新社版『世界の歴史』の第22巻『ロシアの革命』）も書いた。若き日からの社会主義へのかかわりの総括という意味もそこにはあったはずだ。そのころ松田の家からはよく、ジャズ奏者ジョン・コルトレーンの哀切なメロディーが聞こえてきたという話をきいたこともある。

「注射で子どもをいじめないと、子どもはこわがらないでくるようになった。診察室にはいろいろ玩具のはいった籠をおいたから、子どもたちは診察室にはいってくると嬉々としてあそびはじめるのだった。その様子で子どもの病気の重さを判断できた。いつも汽車の玩具にとびつく子が、そうしないで母親のむねにじっとしているときは、これはふだんとちがうことがすぐわかった」。だれより子どもたちの信用が厚かった松田であるが、昭和42年、診療所を閉じる。「肉体をいたわるようになったら誤診をする。信じてきてくれる母親たちにすまない」というのは、その理由であった。そして同年、まるでそれを埋め合わせるかのように『育児の百科』を刊行したのであった。